

# 2019 年度 京都外国語短期大学 在学生調査

総合企画室 IR 推進グループ

2020/2/15

## 1 調査の概要

- 調査対象
  - 2019 年 12 月 1 日時点で在籍している学生のうち、休学している者を除くすべての学生。
- 調査期間と方法
  - 調査は学内に構築したアンケート用サーバを用い、Web 上で回答してもらった。回答は記名式とし、個人を特定するユニークなトークンを含む回答用ページの URL をあらかじめ各個人の E-mail アドレス宛に送付し、各学生のメールに記載された URL から回答してもらった。多くの学生はスマートフォンを利用して回答したようである。
  - アンケートの実施にあたっては 12 月 1 日に回答依頼メールを全ての対象学生に送信するとともに、授業担当教員の協力を得て各学年の必修科目などで周知を行い、教員の判断で授業内でも時間をとって回答してもらった。また未回答の学生については、最初の依頼メールの後に毎週月曜日に回答を促すメールを送信した（冬期休暇中は除く）。
- 主な調査項目
  - 満足や不満
  - 学修意欲や学修行動、意欲など
  - 学修到達度や身についた力
  - 100 分授業や新校舎について
  - 卒業後の進路イメージなど

### 1.1 回答の状況

表 1 回答者数と回答率

	回答者数	回答率	N
男性	36		
女性	114		
合計	150	52%	287

## 2 満足や不満

大学や学生生活などに対する不満や満足をたずねた。満足については 16 の項目を挙げ、それぞれについて 5 段階で評定してもらった。選択肢の文言は過去の調査において天井効果がみられたことから、ポジティブなものとネガティブなものが対称になるように提示するのではなく、ポジティブな選択肢に寄せて提示した。したがって、全体としてみればそれぞれの項目についての満足度は比較的高いといえる。個別の項目をみると、満足だと回答する学生が多いのは「少人数制の授業」や「友人関係・人間関係」であり、あまり満足ではないのは「留学生との交流」や「クラブやサークルなどの課外活動」などである。

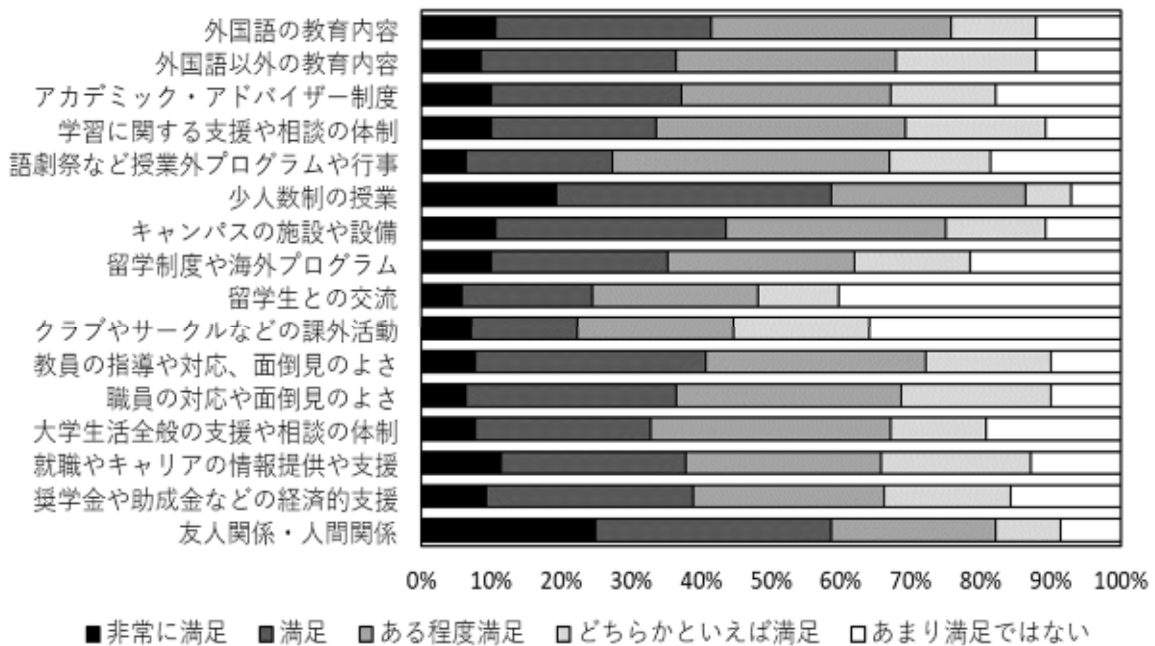


図1 この1年間における学生満足度

### 2.1 大学の施設などに関する不満

大学の施設面を中心に 12 の項目を挙げ、不満がある点をいくつかでも選択してもらい、その内容を自由に記述してもらった。相対的に不満な点として言及が最も多いのが「空き時間をすごせるスペース」や「個人で勉強できるスペース」である。特に短大生は、こういったスペースについて比較的不満を持っていることが分かる。

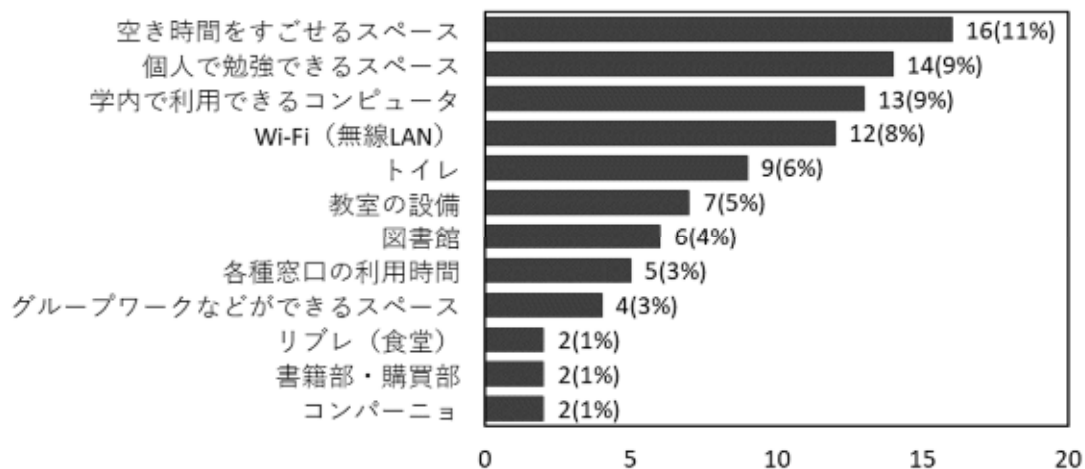


図2 大学の施設や設備等で不満がある点

### 3 学生のニーズへの対応

学生のニーズや要望が大学の運営にどれくらい反映されていると思うかを5段階でたずねた。全体としてみれば、「ある程度反映されている」と「どちらともいえない」という回答が多く、要望が反映されているかどうかという点についていえば、いずれの項目においても学生の要望がある程度反映されているととらえられているようである。

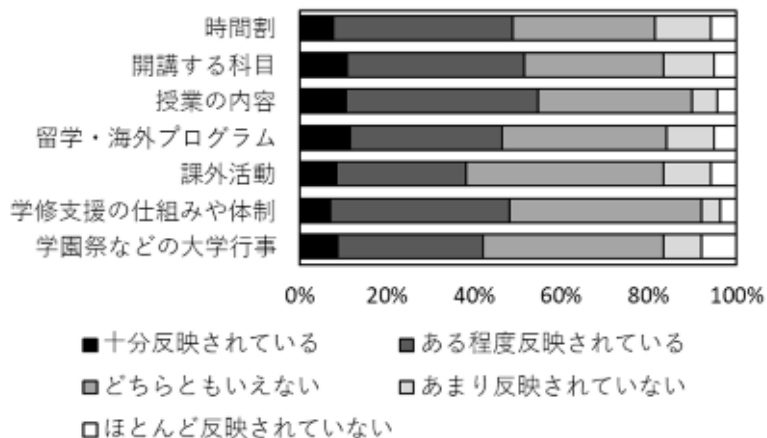


図3 学生のニーズは大学に反映されているか

## 4 授業や時間割について

### 4.1 時間割について

本学では2018年度から時間割を大きく変更し、1コマの授業時間を100分として、授業回数を14回としている。このような時間割編成についてたずねたところ、「あまり問題ない」や「どちらともいえない」という回答が多かった。

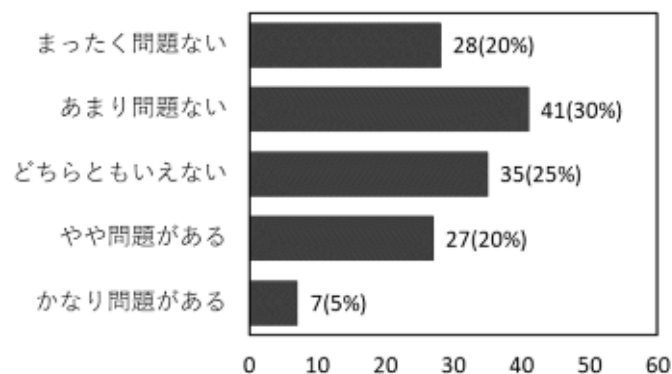


図4 始業時間や時間割、授業時間に対する評価

## 5 授業や履修に対する不満

授業や時間割、履修に対する不満について、具体的な項目を挙げてたずねた。時間割については、興味を持てる授業が少ないことや、授業の曜日・時限に対する不満が大きいようである。また、他の受講生の態度やとりたい授業が取れない時間割などが、比較的不満が大きい点である。他方で、カリキュラムの体系、受講生数についての不満はあまり大きくはないようである。時間割は制度設計の問題として改善の余地がある。これらの具体的な問題点を検証し、改善に取り組む必要がある。

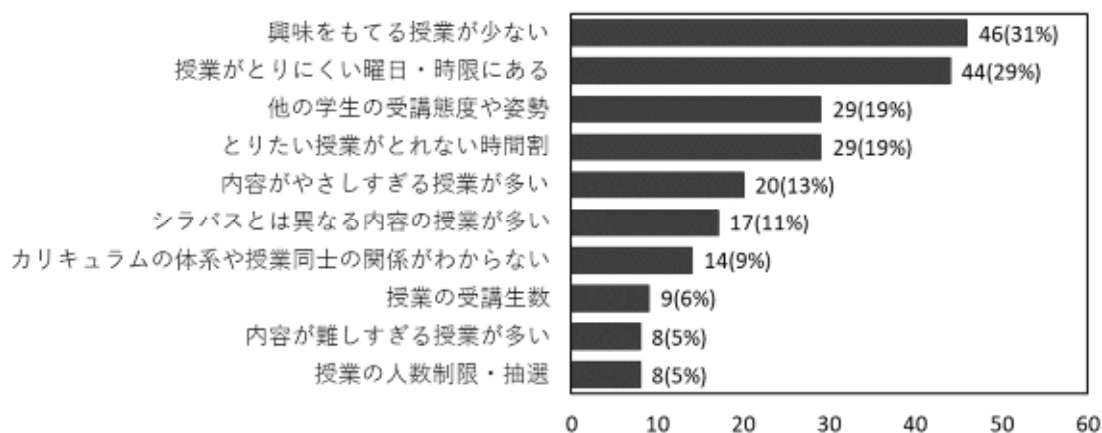


図5 授業や履修に対する不満

## 6 授業外の学習時間

### 6.1 授業の課題や宿題

授業外の学習時間について、授業に関連する課題や宿題の時間とそれ以外の自主的な学習時間において、それぞれ授業期間中の1日あたりの平均的な時間をたずねた。多くの学生は授業に関する学習を1時間から2時間程度行い、それ以外の学習は概ね1時間から2時間程度となっている。本学は外国語大学であることから、日常的に宿題が課される授業が多く、学生たちは日々それらに取り組んでいることがうかがえる。

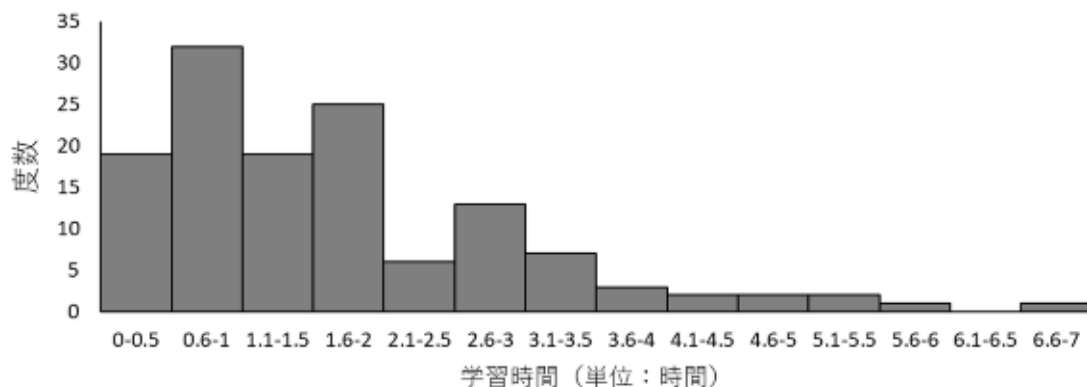


図6 授業の課題や宿題をする時間

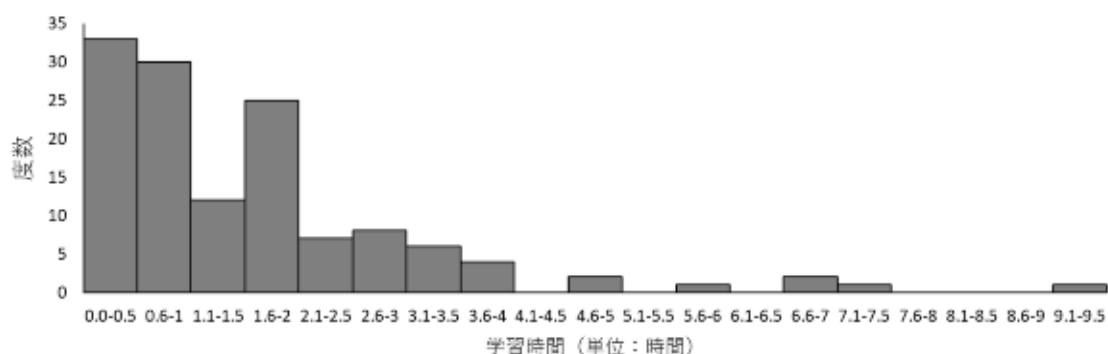


図7 自主的な予習・復習等の時間

## 7 学習意欲

大学での日々の学習において、主体的に意欲をもって取り組んでいるかどうかを外国語学習とそれ以外の学習にわけてたずねた。外国語大学であることから、外国語学習については比較的主体的に取り組むことができているという回答が多くなっている。他方で、外国語学習と比べるとそれ以外の学習への意欲は、相対的にやや低くなっているようにみえる。本学の教育は、外国語教育とともに幅広く豊かな教養教育をもう一つの柱としており、それが両輪となって社会で活躍できる人材の育成を目指しているが、学生の学習意欲は外国語にやや偏っているようである。本学の教育において、外国語教育と教養教育が両輪として機能するように、教育理念やカリキュラムを学生によりわかりやすく伝えていくことが重要だろう。

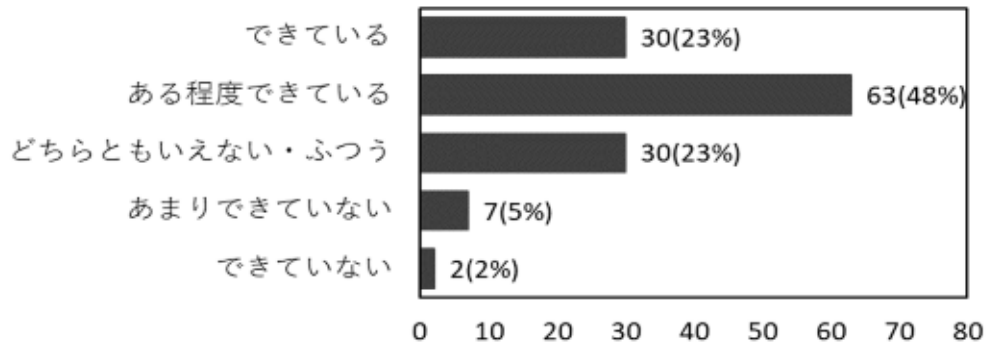


図8 意欲を持って外国語学習に取り組んでいるか

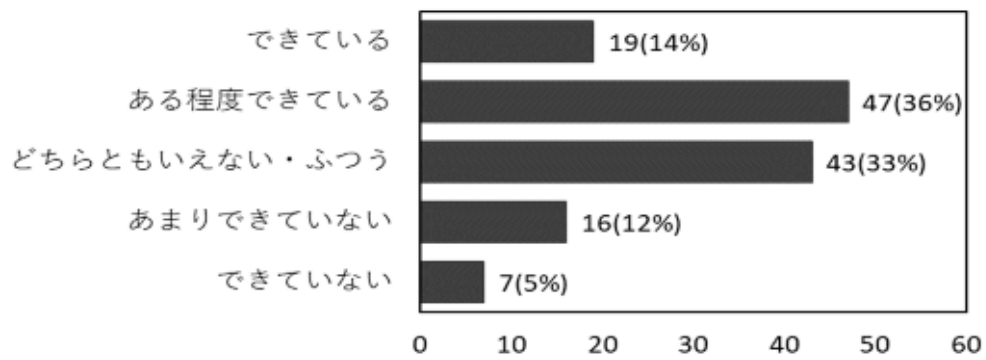


図9 意欲を持って外国語以外の学習に取り組んでいるか

## 8 大学での学習に対する手応え

大学での学習について、成長の実感や手応えをたずねた。全体の傾向として、「授業内容がしっかり理解できている」や「人間的に成長している」「目的をもって勉強ができていいる」など、ポジティブに成長の実感や手ごたえを感じているようである。他方で、「課題の負担が大きすぎる」「授業についていけない」「授業に興味を持ってない」など、ネガティブな回答は相対的に少ない。このように学生が学習に対して手ごたえを感じられるのも、授業のレベルや目標が適切に設定され、しっかりと学生を成長させられるような教育が行われているためだろう。改革や改善の余地はあるとしても、このまま本学の教育の良い面をさらに伸ばしていくことが期待される。

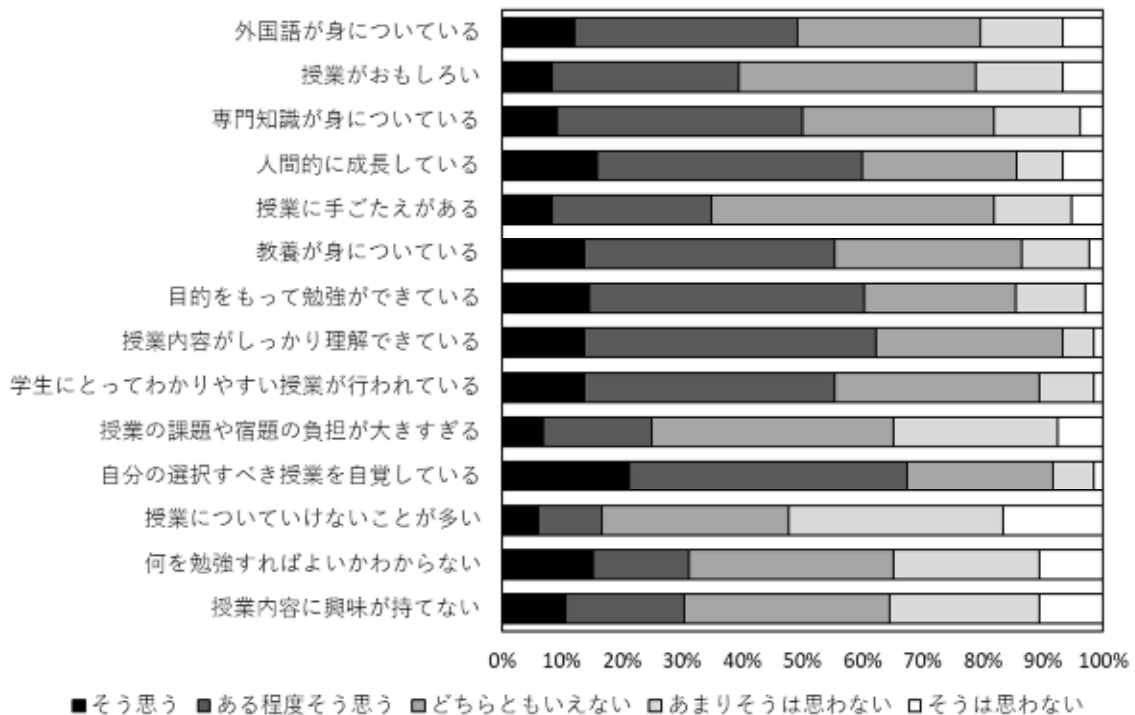


図 10 大学での学修について感じること

### 9 授業内容や学習方法の相談

授業に関することや学習方法などを教員に相談できるかをたずねた。本学では授業担任（アカデミック・アドバイザー）制度を導入し、学生の学習を支援する体制を整えている。しかし、ここでの回答では、アカデミック・アドバイザーの先生への相談が特にしやすいということではなく、どちらかといえば授業の直接の担当者のほうが相談しやすいと回答する傾向がある。アカデミック・アドバイザー制度は、教員にとっても負担が大きくなりがちであるが、その効果は「学習相談」という点では十分に発揮されていないように見える。アカデミック・アドバイザー制度のあり方を再検討する必要があるかもしれない。他方で、学科の先生とアカデミック・アドバイザーに対しては同じような回答となっていることから、個々の学生に対して「担任」を一对一で設定しなくても、学科教員と学生との関係においてある程度対応できていると捉えることもできる。

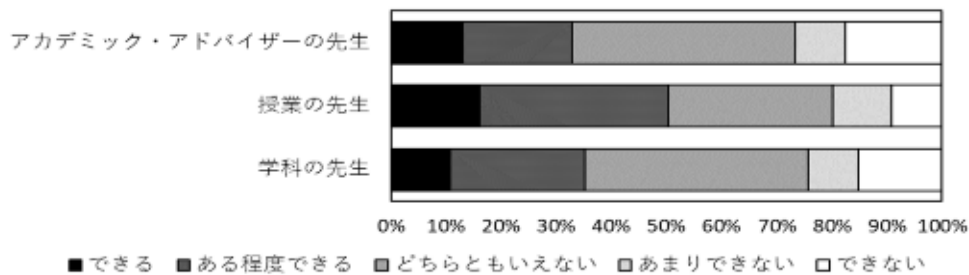


図 11 授業でわからない点や学習方法を教員に相談できるか

## 10 学習行動・学習のスタイル

学習行動や学習の進め方などについてたずねた。学生の学習の中心は、やはり授業だということがわかる。すなわち、授業の課題や宿題が学習の中心であり、履修した授業はできるだけ良い成績で最後まで履修しようとするのが、大学での学びの中心的な価値となっているようである。他方で、そこから発展的に勉強したり、予習・復習を行うという回答は相対的に少ない。大学の教育が授業を中心として構成されている以上、当然の結果ではあるが、自らの興味関心によってより発展的に学習を進められる自律的な学習者を育成することも大学教育の大きな課題でもある。そうした学生をどう育成するのかは、本学に限らず教育機関としての大学の重要な課題といえるだろう。

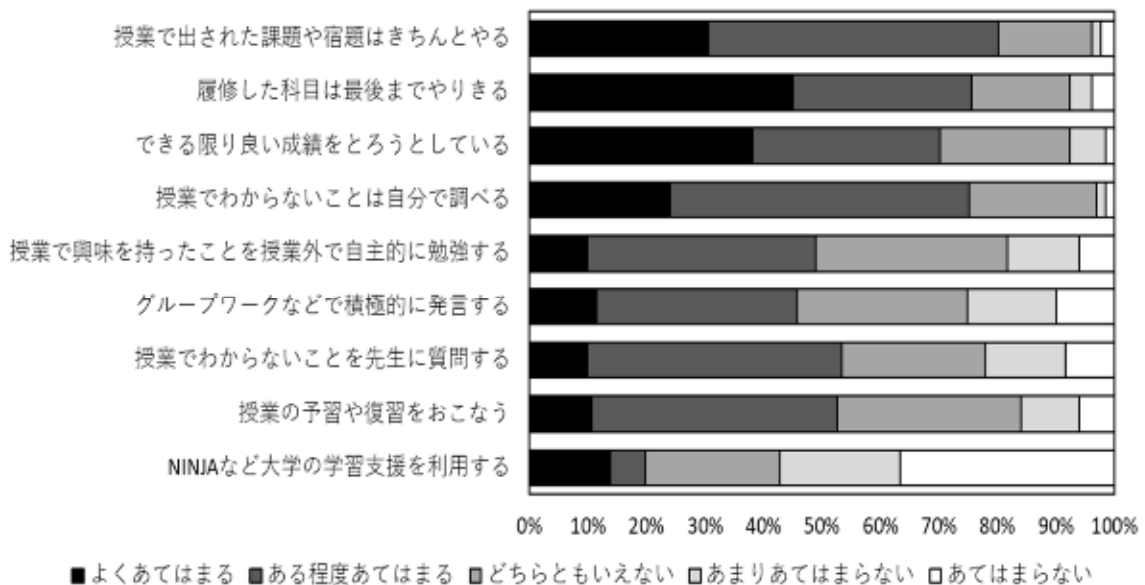


図 12 自分自身の学修スタイル

## 11 学習成果・身についた力

### 11.1 外国語や学科の専門知識

この1年間で外国語および学科の専門知識がどの程度身についたかをたずねた。専攻する言語の技能はいずれも一定程度は身につけているようである。特に、「リスニング」と「リーディング」が身についたと回答する割合が多い。また、「レポートなど日本語のライティング」や「幅広い教養」が身についたと回答する割合も高いことが特徴的である。



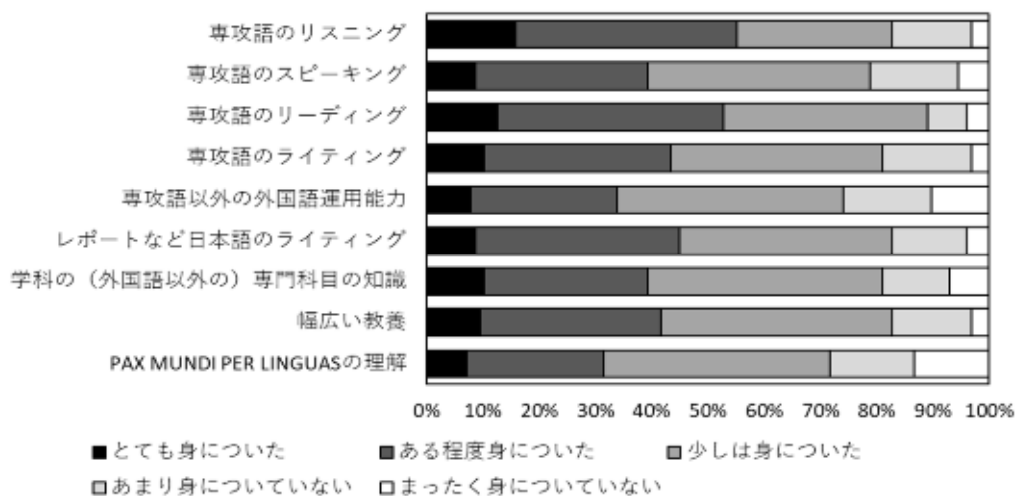


図 13 外国語や学科の専門知識の修得

## 11.2 身についた能力

この1年間でどのような能力が身についたか、ないしは伸びたかをたずねた。最も言及が多く、4割弱の学生が選択するのが、コミュニケーション能力である。コミュニケーション能力は外国語学習の進展とともに身につけていくものでもあり、外国語でコミュニケーションがとれるようになることでより実感できる能力の伸びであることから、外国語大学らしい成長実感のあり方であるといえる。その他には、異文化共生やプレゼンテーション能力などへの言及が多い。他方で、判断力や企画力、計画力などいわゆる「論理的な」能力の成長実感は薄いようである。

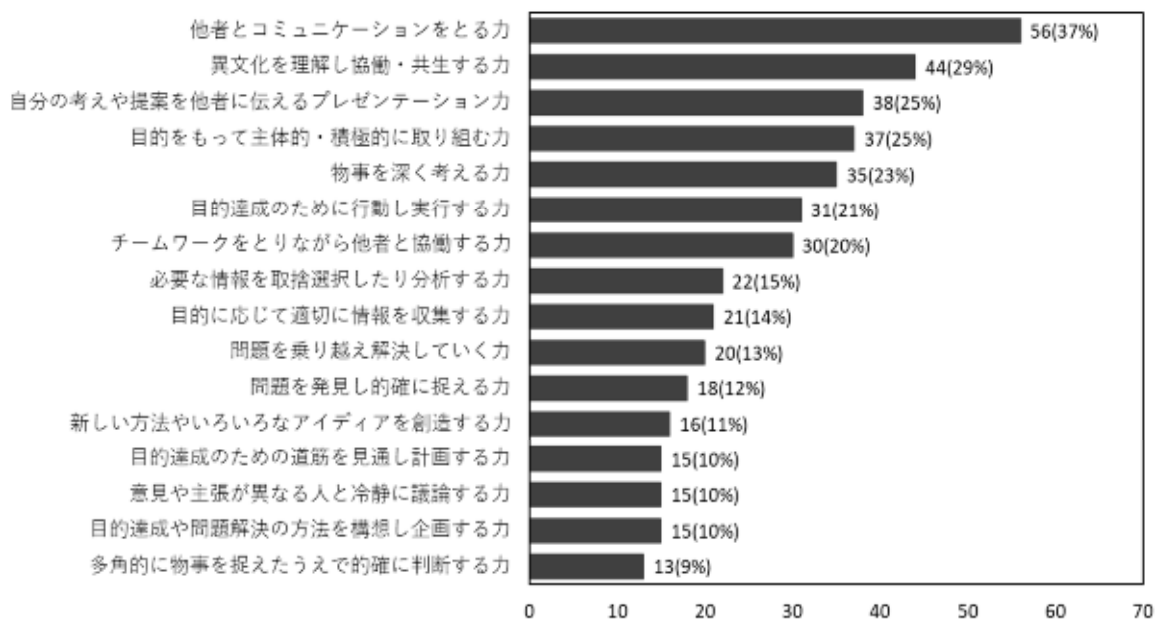


図 14 この1年間で身についた力

## 12 授業選択の基準

学生が授業を選択するときに重視している基準をたずねたところ、「授業の内容」、「将来の自分の目標との関係」、「身につく知識や能力」、「曜日や時限」が特に重視されていることがわかる。授業内容についてはカリキュラム上の位置づけと個々の科目の問題であるが、本来ならば副次的な選択要因であるべきである曜日や時限が同時に重視されている。学生にとって曜日や時限が重要な要因である以上、体系的な履修やカリキュラムとの兼ね合いで授業を配置する必要があるといえる。

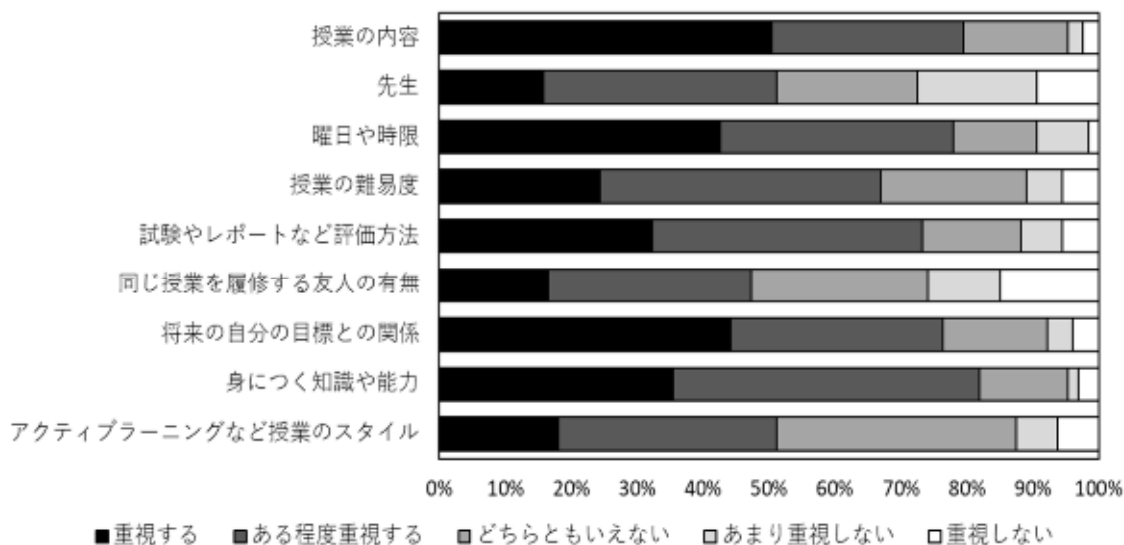


図 15 授業の選択で重視する点

## 13 学修に必要な支援

大学での学修等を進めていくために必要だと思う支援についてたずねた。外国語学習の方法に対する支援とともに、キャリアや就職に向けた支援のニーズの高さがうかがえる。前者は当然としても、大学で学ぶ内容を踏まえて、それらを将来につなげるキャリア支援が必要とされているようである。また、学生同士の学びのコミュニティ形成の必要性も高いようである。他方で、教員側の問題意識が比較的高い母語でのライティングの支援については、学生の必要性の認識は低い。学生のニーズに対応することも重要であるが、学生自身のニーズとともに教員の意見も踏まえ、その必要性が学生にも理解できるように改善を進める必要があるだろう。なお、「その他」の項目への回答はなかったため、図 16 には掲載していない。

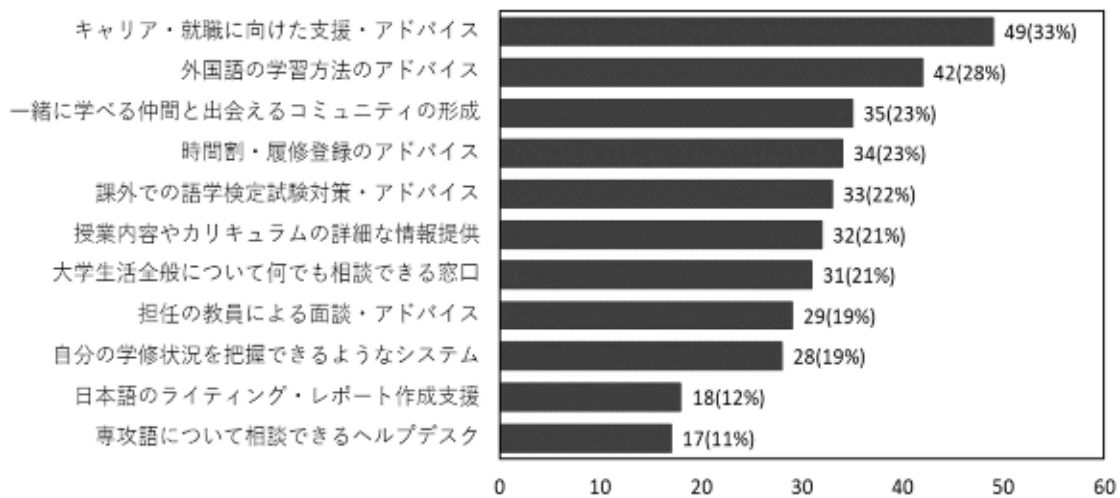


図 16 学修を進めるために必要だと思う支援

## 14 中長期の学外プログラムへの参加

### 14.1 中長期間の学外プログラムに参加したいか

中長期の学外プログラムへの参加希望をたずねたところ、多くの学生が参加したいと考えていることがわかる。長期間の学外プログラムへの参加は、費用や時間など様々なハードルがあるため、参加意欲に対して実際に参加できる学生は少ない傾向にある。授業との兼ね合いや財政的支援、カリキュラム全体の中での位置づけなど、総合的に検討しなければならない問題だろう。

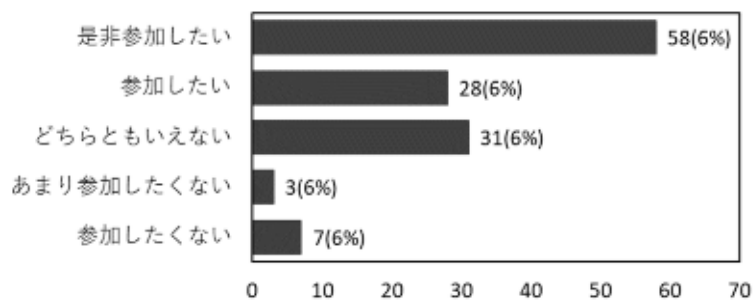


図 17 中長期の学外プログラムに参加したいか

このようなプログラムに参加するにあたって、どのような制度が必要だと思うかを学生にたずねると、単位取得方法の多様化への言及が顕著に多い。これは、標準的な年限で卒業しつつ、そうした経験もしっかりしたいということを反映したものであると考えられ、長期学外プログラムを開発するとすれば、カリキュラムにしっかりと位置づけ対応しなければならないといえる。なお、2018年度からの時間割変更の目的の一つに長期間の学外プログラムへの対応が含まれているが、現状では学生にとってあまり効果的な施策だとは言いえないようである。

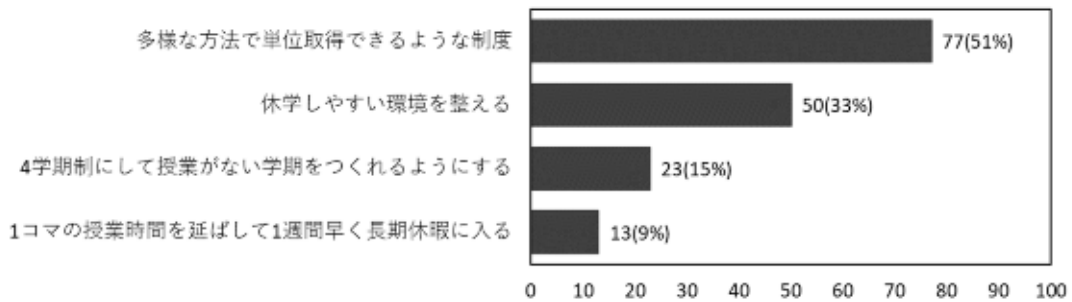


図 18 中長期の学外プログラムに参加するのに必要なこと

## 15 卒業後の進路や目標

卒業後の進路や目標がどれくらい明確になっているかをたずねたところ、半数の学生は「ある程度」以上は目標を見出していることがわかる。卒業後の見通しについて学年別に見ると、やはり進路が具体的に決まっている学生が多い2年生の方がより明確になっているようである。

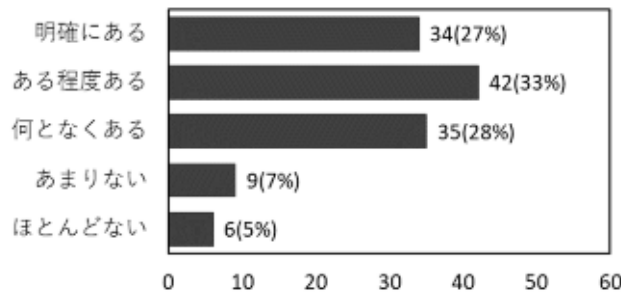


図 19 卒業後の進路や目標があるか

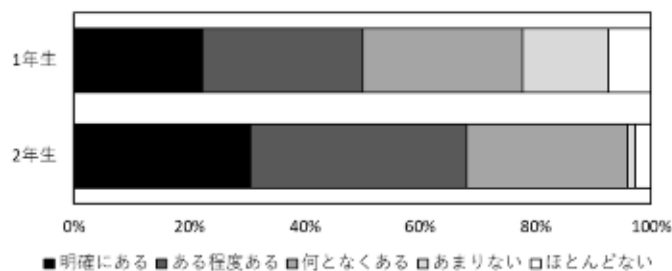


図 20 卒業後の進路や目標があるか（学年別）

## 16 大学で学んだことが将来に役立つか

大学で学んだことが卒業後の進路や人生において役に立つかどうかをたずねた。多くの学生は「ある程度役立つ」と回答しているが、「どちらともいえない」と回答する学生も一定数存在している。本学は外国語大学であるため、外国語運用能力を社会で役立てるイメージを持ちやすいのかもしれない。学年別に見ると顕著な差は見られないが、1年生のポジティブな回答がやや多い。

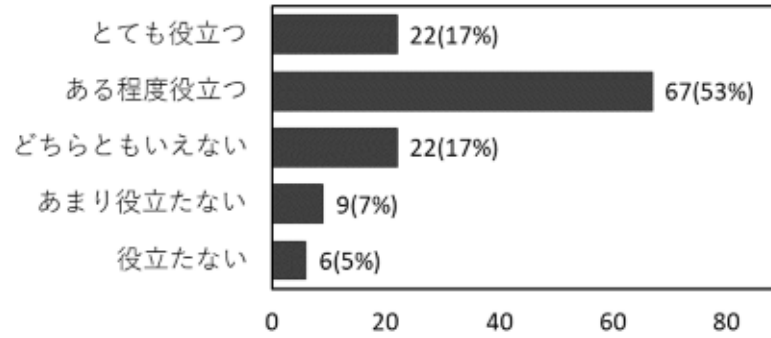


図 21 大学で学んだことが将来に役立つか

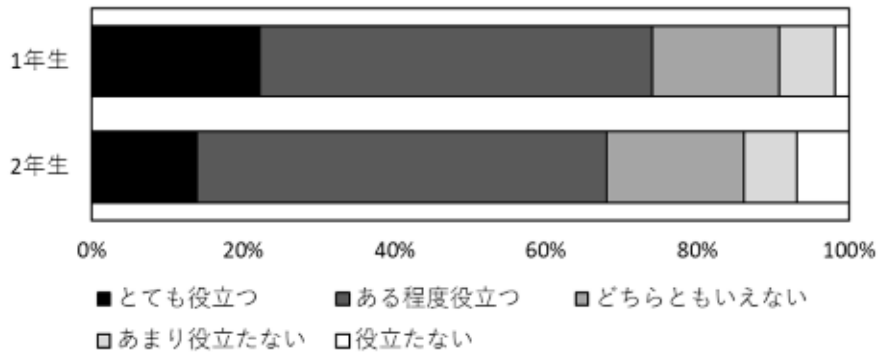


図 22 大学で学んだことが将来に役立つか（学年別）

## 17 卒業後の進路について

卒業後の進路について、希望や大学で学んだこととの関係をたずねた。外国語大学であることから、やはり「学んだ外国語を活かしたい」という学生の割合が多いが、その一方で「世界を飛び回る」や「外国で仕事する」などの割合は相対的に低い。また、「安定した仕事に就きたい」という回答も多いことから、安定志向の保守的な学生の価値観が見えてくる。

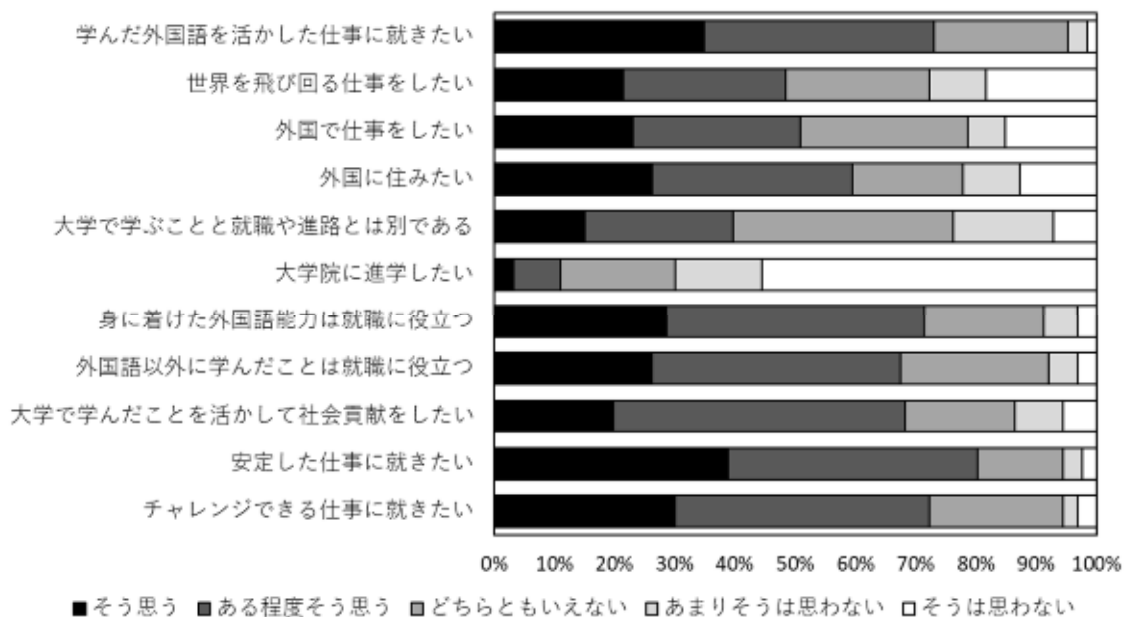


図 23 卒業後の進路について

## 18 大学内での居場所

大学で授業時間外に過ごす場所について、勉強やレポート作成、休憩などにわけてたずねた。

勉強をする場所としては、リブレが最も多く、新しくできた 4 号館の廊下などに設置されているオープンスペースの机やラーニングコモンズを利用して勉強している学生も比較的多い。授業外でのグループワークでも 4 号館の教室外スペースは活用されているようであるが、11 号館周辺のベンチの利用も比較的多い。レポート作成でも 4 号館の教室外スペースは活用されているが、図書館はそれほど利用されていない。また、大学外という回答が少ないことから、短大生については基本的に大学内でレポートを書く傾向が強いと考えられる。食事と休憩などをする場所については、特に 4 号館の廊下のスペースやラーニングコモンズが活用されており、4 号館のオープンスペースにある机やソファなどの多様な利用実態がうかがえる。

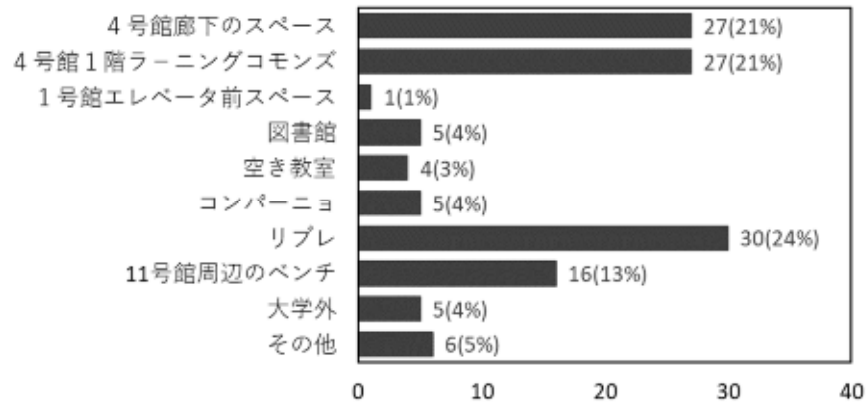


図 24 「自分の勉強」をする場所

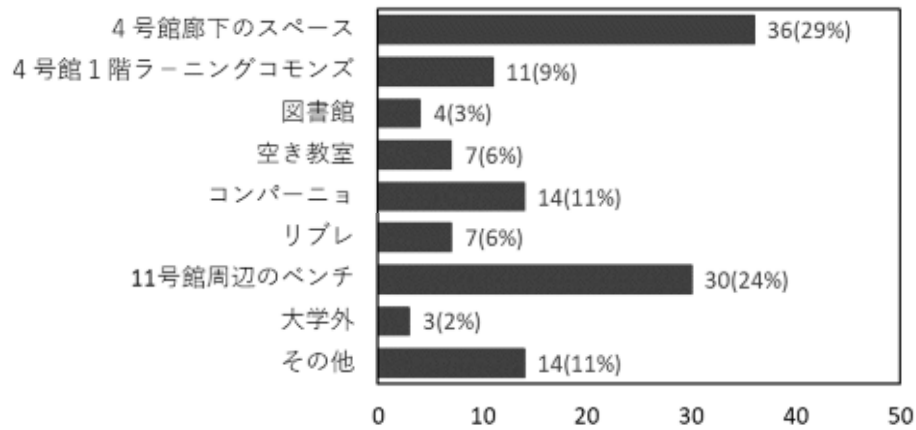


図 25 「複数人でグループワーク」をする場所

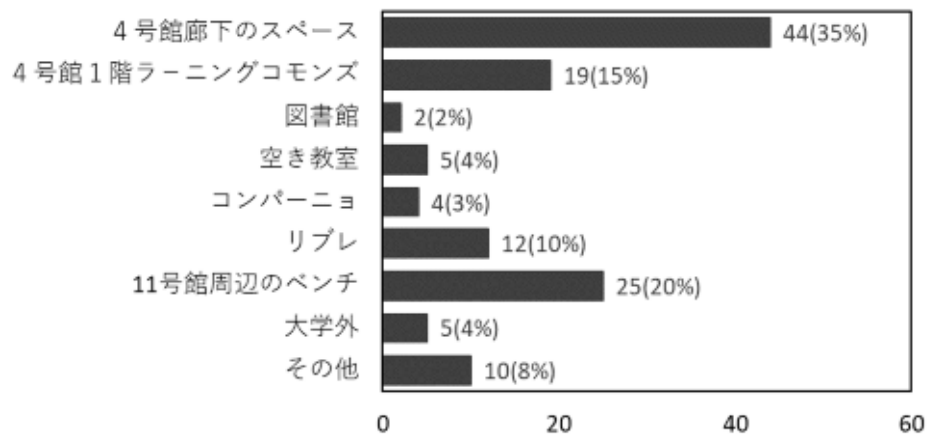


図 26 「レポート作成」をする場所

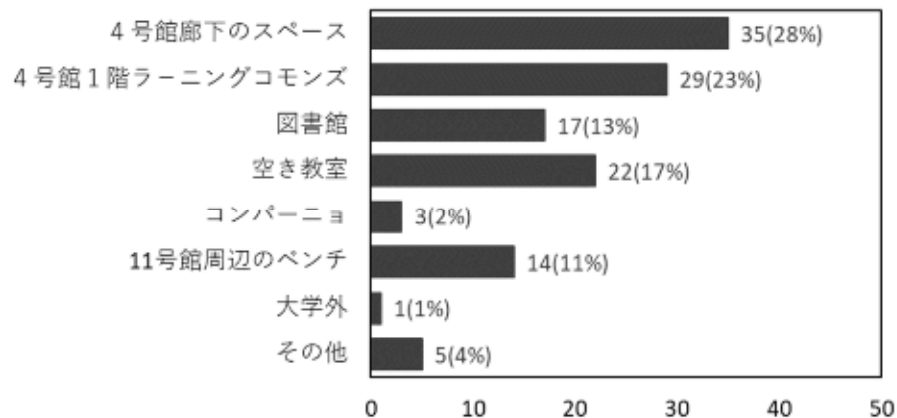


図 27 「食事」をする場所

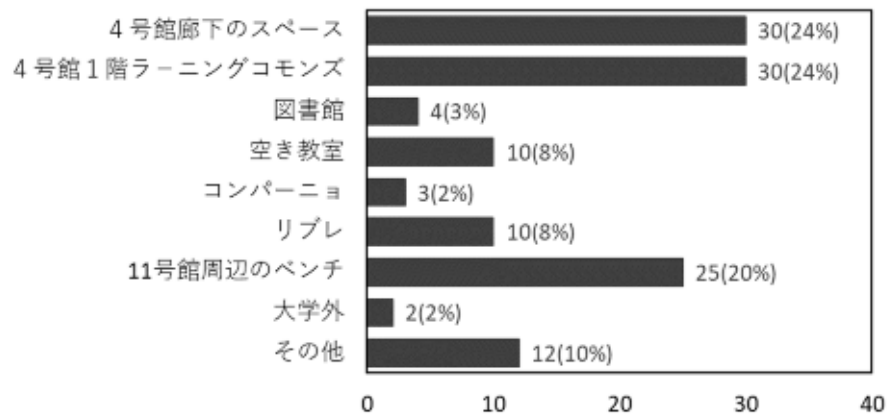


図 28 「休憩・リラックス」をする場所

## 19 大学内で自習をする空間に求めること

近年、多くの大学で「ラーニングcommons」的な空間を整備しつつあり、学生の授業外の多様な学習や活動に対応できるようになってきている。そこで、学生が大学内にどのような空間を必要としているのかをたずねた。学習する空間の条件としては、一人で集中できて他人の目が気にならないということが重要な要素であることがうかがえる。他方で、開放的な場所という選択肢への言及は少ない。パーソナルなスペースが確保しやすく、一人で集中できる場所のニーズが高いということだろう。しかし、先に見たように4号館のオープンスペースの机などが授業外の学習スペースとして活用されていることなどを踏まえれば、必ずしも伝統的な図書館のような場所を増やせばよいというわけでもないと考えられる。学生の行動やニーズをさらに調査していくことで、大学として整備すべき空間のあり方が見えてくるだろう。



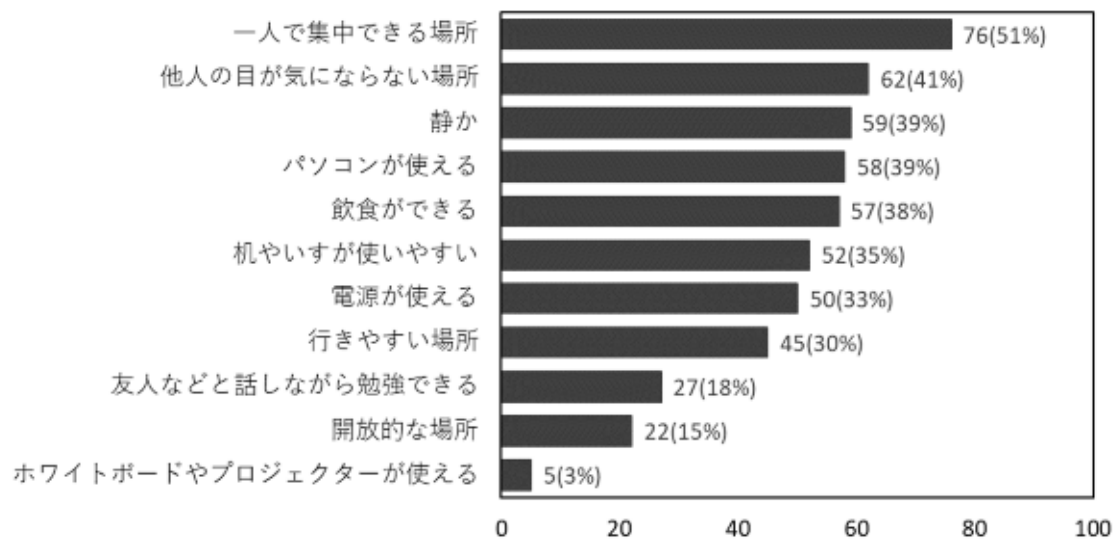


図 29 大学内で自習をするときに重視する条件

## 20 自分の学習状況の把握

本学では、自律的な学習者の育成を目指しており、そのために NINJA（外国語自立学習支援室）を設置するなど、学生のサポートを行っている。そこで、学生が自らの学習到達度や目標をどれくらい把握し、また意識しているのかをたずねた。全体的な傾向としては、自分自身の学習状況や到達度をある程度把握できていると回答する学生が多いようである。また、こうした学習状況の把握や今後の計画を立てるのに、大学が提供している「学生サポートシステム」が一定の成果をあげていることがうかがえる。

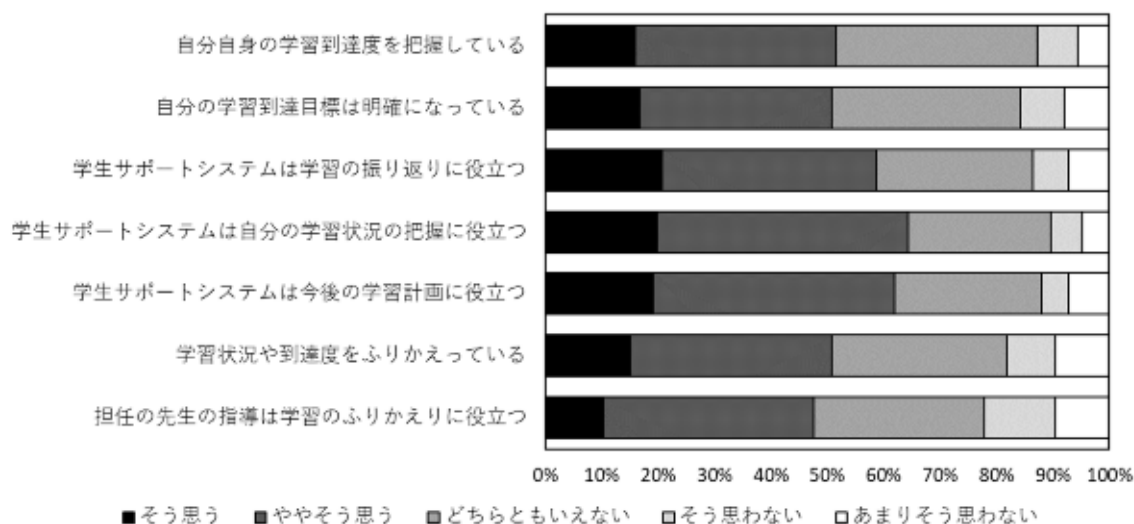


図 30 自分の学習状況の把握

## 21 調査や研究の環境

授業等で調査や研究をする際の大学の環境についてたずねた。全体的な傾向としては、設問に挙げた項目についてはある程度整っているとの回答が多い。

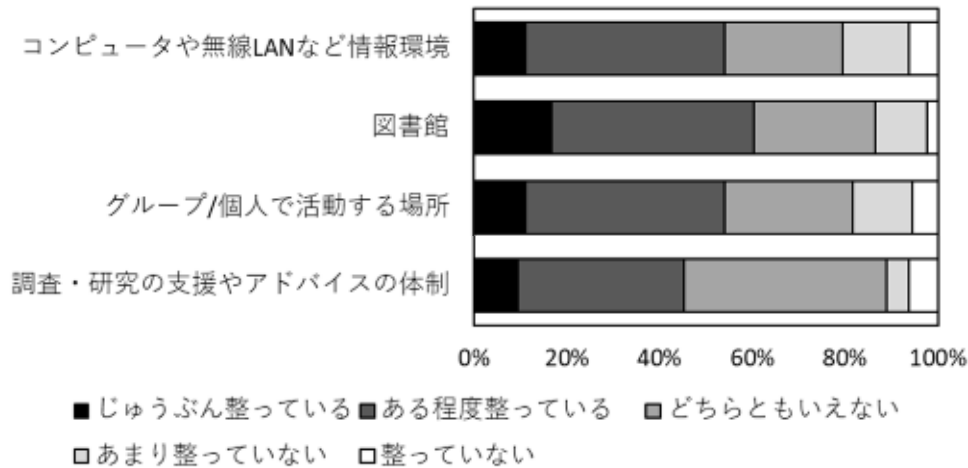


図 31 授業等で調べ物や研究する環境は整っているか

## 22 大学生生活の悩み

大学生生活を送る上での悩みについてたずねた。最も言及が多かったのは、就職や将来の進路についてである。これに続いて、学習意欲に関することへの言及が多い。卒業後の進路についてはキャリア支援、学習に関することについては学習支援の課題として関係する部署や委員会等での認識が必要だろう。

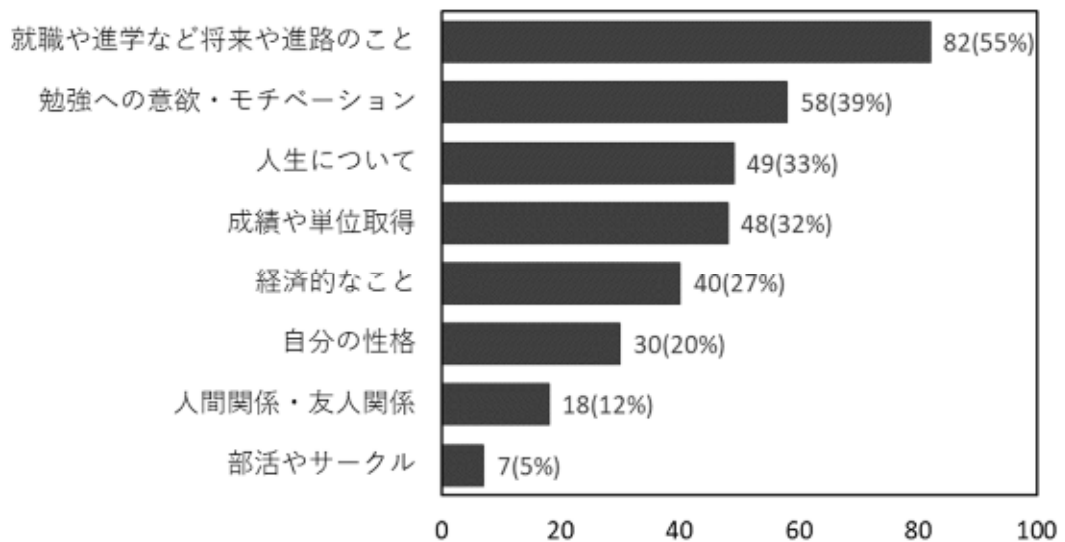


図 32 大学生生活における悩みごと

## 23 通学時間

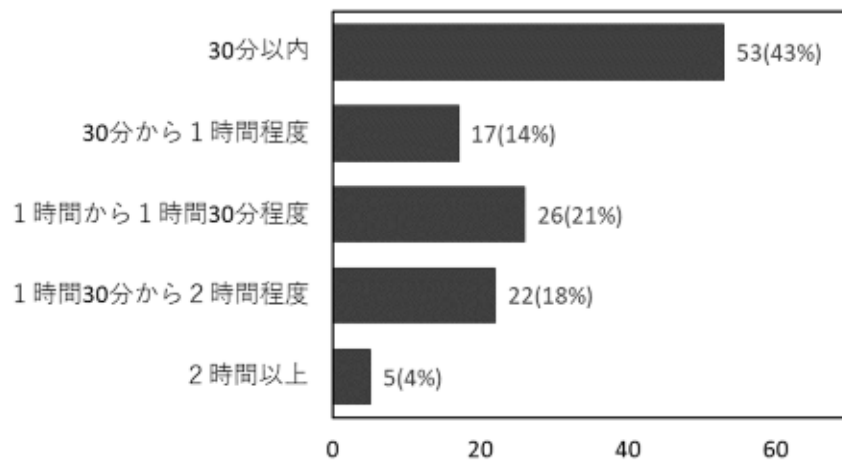


図 33 通学時間

## 24 アルバイトの状況

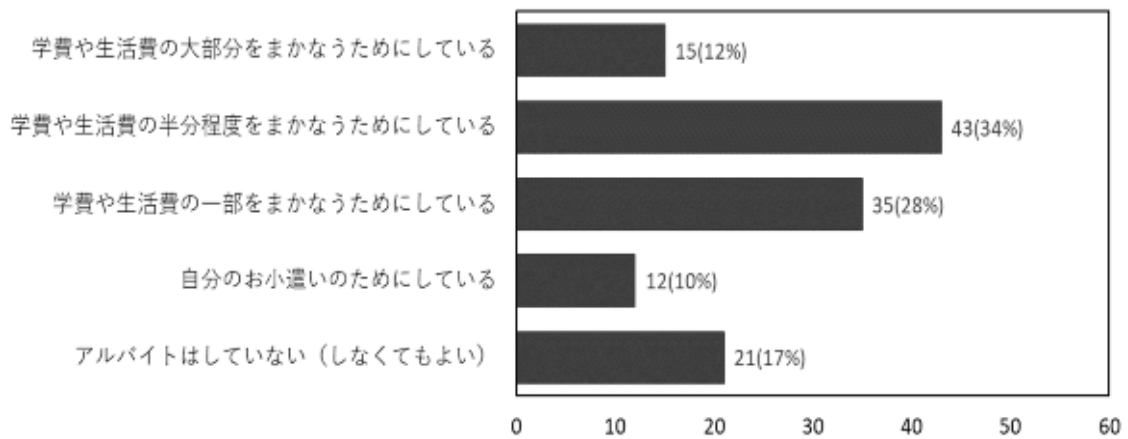


図 34 アルバイトの状況